

いちごドリルプリント

答え合わせ・解説

問1	答え 3 利根川	群馬県の大水上山を源流とし、関東平野を横断して千葉県と茨城県の境から太平洋に注ぐ利根川は、日本最大の流域面積を誇る河川です。選択肢にある信濃川は日本で最も長い河川（長さ1位）ですが、流域面積では利根川が1位となります。また、荒川は利根川の西側を流れる河川であり、石狩川は北海道を流れる日本第2位の流域面積を持つ河川です。
問2	答え 4 冬に北西の季節風の影響を受けるため、1月や12月の降水量が月間300mmを超えるなど、夏よりも冬に降水量が多い。	日本海側の気候は、冬にシベリア気団から吹き出す北西の季節風が、暖流の流れる日本海の上空を通る際に水蒸気を蓄えることで形成されます。この湿った空気が日本列島の山脈にぶつかることで、日本海側には大雪や雨がもたらされ、太平洋側とは対照的に冬の降水量が非常に多くなるという特徴があります。
問3	答え 3 鉄道の盛り土や標高のわずかな差が境界となり、浸水域や被害の程度に大きな影響を与えていることがわかる	津波の浸水範囲は地形の標高差に強く影響されます。仙台平野のように平坦な土地では、鉄道の盛り土（線路を敷くために高く積み重ねた土）などがわずかな高低差を生み出し、浸水を食い止めたり、逆にその周辺で被害を拡大させたりする要因となります。浸水区域が鉄道の東側に集中しているという事実は、その地点を境に標高や地形的条件が異なっていたことを示唆しており、減災計画を立てる上で重要なデータとなります。
問4	答え 3 対馬海流（暖流）	九州北西部から対馬海峡を経て日本海へ流れ込むこの海流は、黒潮（日本海流）から分かれた暖流です。五島列島などの長崎県周辺を通過し、日本海側の気候や漁業に大きな影響を与えています。対馬海峡の名前を冠しており、低緯度から暖かい水を運び性質を持っています。
問5	答え 2 地震後に発生する津波から、近くに高台がない場所でも一時的に命を守るため	津波対策では高い場所への避難が原則ですが、平地が広がる地域や避難できる高台が遠い場所では、迅速な移動が困難です。そのため、人工的に高い避難場所を作る「避難タワー」の整備が進められています。これは、三陸海岸のような津波被害が想定される地域の防災対策として、過去の教訓（伝承碑に記された内容など）を現代のインフラ整備に活かした事例と言えます。
問6	答え 3 リアス海岸	陸地が沈み込んだり海面が上昇したりすることで、もともと山地だった場所の谷に海水が入り込んで形成されます。海岸線がギザギザに入り組んでいるのが特徴で、日本では三陸海岸のほか、福井県の若狭湾や三重県の志摩半島などに代表例が見られます。
問7	答え 2 シベリア高気圧から吹き出す冷たく乾いた北西の季節風が、日本海を渡る際に水蒸気を蓄え、山脈にぶつかって上昇気流が生じるため。	日本の冬は、ユーラシア大陸のシベリア高気圧から冷たく乾燥した北西の季節風が吹き込みます。この風が日本海を渡る際に、対馬海流（暖流）の影響で湿った空気を取り込み、本州中央の山脈にぶつかることで、日本海側に雪や雨といった大量の降水をもたらします。
問8	答え 4 山地の谷の部分に海水が入り込み、小さな岬と湾が交互に並ぶ地形となったため	リアス海岸は、起伏の激しい山地が沈水（地盤の沈下または海面の上昇）することで、もともとあった谷の部分に海水が入り込んで形成されました。このプロセスにより、奥行きのある湾と突き出た岬が連続する複雑な海岸線が生まれます。他の選択肢は、それぞれ扇状地や三角州、砂州、干拓地の説明です。
問9	答え 3 南東から吹き込む湿った季節風が山地にあたり、上昇気流が発生して雨を降らせるため	日本の夏は、小笠原気圧（太平洋高気圧）から南東の季節風が吹き込みます。この湿った風が四国山地や紀伊山地などの高い山々にぶつかることで雨雲が発達し、太平洋側の地域に多くの降水をもたらします。冬は逆に、北西からの季節風が山脈を越える際に水分を失い、乾いた風として吹き下ろすため、乾燥した気候となります。
問10	答え 2 中央高地の気候	長野県の野辺山などに代表されるこの気候は、標高の高さが気温に大きな影響を与えています。内陸部で周囲を山々に囲まれているため、海からの湿った空気が入りにくく、年間を通じて降水量が比較的に少ないという特性があります。対照的に、高知県などの太平洋側の気候では、夏は高温で降水量も非常に多くなります。
問11	答え 1 水はけの良さを利用した、ブドウや桃などの果樹園	扇状地は粒子が粗い土砂で構成されているため、水が地下に浸透しやすく（伏流）、水田には適しません。一方で、果樹栽培は水はけの良い土地を好むため、山梨県の甲府盆地などの扇状地では果樹園が盛んに作られてきました。扇頂から扇央にかけて、このような景観がよく見られます。
問12	答え 4 内陸部の都市は標高が比較的高く、海から離れているため冬の夜間の放射冷却の影響を受けやすい一方で、太平洋側の都市は暖流である黒潮の影響を受けやすく、冬でも晴天が多いため気温が下がりにくい。	日本の気候は地形や海流の影響を強く受けます。内陸部に位置する都市は、海から離れているため比熱の関係で陸地が冷えやすく、さらに盆地などでは夜間に地表の熱が奪われる放射冷却現象が顕著になるため、1月の平均気温が氷点下になるなど寒さが厳しくなります。一方、太平洋側の都市は、沿岸を流れる暖流（黒潮）の影響で冬でも比較的温暖であり、冬の季節風が奥羽山脈や中央アルプスなどの山を越える際に水分を落とすため、太平洋側では乾燥した晴天の日が多くなり、日照によって気温が下がりにくいという特徴があります。